

近代京都における主要商店街の店舗復原

—《祇園町》を事例とした方法の検討—

加藤 政洋・河角 直美

I. 研究の背景と目的

- (1) 「京都市明細図」の発見と活用
- (2) 《祇園町》を事例とする意義

II. 基礎資料の検討と復原方法

- (1) 昭和前期の地図類
- (2) 名簿資料と電話番号
- (3) 新聞広告の商店街地図
- (4) 復原の手順

III. 昭和初期《祇園町》の店舗復原

- (1) 「四條ぶるばある」記載の店舗
- (2) 位置の確定
- (3) 強制疎開の影響

IV. 成果と展望

- (1) 《祇園町》の変容
- (2) 残された課題と展望

I. 研究の背景と目的

(1) 「京都市明細図」の発見と活用

20世紀前半の都市景観ないし市街地を復原するための基礎資料として、「火災保険図」に代表される大縮尺の都市地図の利用が、牛垣雄矢の一連の研究¹⁾などによって注目されるようになった。近年では、「鬧市」といった一時的かつミクロ地理的な商業空間の復原にも活用されるなど、その用途は分野を問わずに広がりを見せている²⁾。

製作された地図群の偏在と局所性を背景に、研究対象の多くは東京に限られているも

の、京都でも近年、相次いで発見された「火災保険図」に類する大縮尺の都市地図をめぐって、様々な研究成果が発表されはじめた。その地図とは、京都市の長谷川家住宅ならびに京都府立総合資料館（現在は京都府立京都学・歴彩館）に所蔵されていた「京都市明細図」にほかならない（以下「長谷川家版」・「総合資料館版」と省略）。

これら二組の「京都市明細図」の内容に関しては、すでに多くの研究蓄積があるため、ここで詳細を述べることはしないが、長谷川家版は大正15(1926)年から昭和2(1927)年にかけて作製されたと推定される、いわば刊行時の原版にあたり、総合資料館版はその後の加筆修正を経て、戦後(1949～1951年頃)に建物の用途に応じた着色や階数の書き込みなどがなされたものと考えられている³⁾。

前者には作製時の京都市域を対象に、地形図や都市計画図では把握することのできない個々の建物の形状や細街路(路地)まで描かれており、それをベースとした後者では、一つひとつの区画を緑・赤・黄・青・紫などの色で塗り分けることによって、建物用途の様態(業種)を視覚的に表現しているところに大きな特色がある。このような特徴を有する「京都市明細図」は、「住宅地図」に先行する大縮尺(1/1,200)の都市地図であり、20世紀前期京都における既成市街地の土地建物区画(総合資料館版ではその用途)をほぼ全域で

キーワード：近代京都、商店街、祇園町、景観復原、京都市明細図

把握できるという点で、資料としての価値はきわめて大きい。

現在、総合資料館版は京都府立京都学・歴史館のインターネットサービス「京の記憶アーカイブ」に収録されているほか、立命館大学アート・リサーチセンターが長谷川家版と総合資料館版の双方をGoogleマップに重ね合わせることで「近代京都オーバーレイマップ」としてインターネット公開しており⁴⁾、閲覧する上での利便性は高い。

社会的にも学術的にも大きな関心を集めた「京都市明細図」は、昭和前期京都の都市地理に関わる研究資料として、広く参照されるようになってきた。例えば、建物の形状とその分布にもとづき、町家の形成や市街地拡大のプロセスが検討されたほか⁵⁾、戦後占領期の建物用途にまつわる「接収住宅」などの書き込みの分析から、京都における占領の実態を明らかにした注目すべき研究もあらわれている⁶⁾。

このような研究動向と成果の蓄積を踏まえた上で、本研究では「京都市明細図」をベースにしつつ、「商工名鑑」に類する名簿類や電話帳などの様々な資料を用いて、昭和戦前期における主要商店街の景観を個別の店舗の立地にまでふみこんで復原することを目的とする。あわせて、その方法と意義を考察するほか、文学作品に描かれた叙景が店舗の立地や景観の復原に資するという点についても論及する。

この試みは、「京都市明細図」そのものを分析・考察の対象としてきた既存の研究とは一線を画し、区画の高精度な線描という特性を立脚点とした、店舗の立地を復原するという点において、牛垣の問題関心に立ち返るものとなる。「京都市明細図」をベースにするということは、過去100年近くにわたる建物用途の追跡を可能にするものであり、商店街の機能・景観変化を長期的な視点から明らかにできるという点で、歴史地理学的な意義も

少なからずあると思われる。すなわち、ある一時点の社会経済や文化的な局面と対応させて商業空間の特色を分析できるだけでなく、通時的な検討も可能となる。

今回対象とするのは、現在では観光商店街とでも称すべき繁華街の一つとなっている《祇園町》である。この《祇園町》を事例として、店舗立地の復原に資する材料を精査しながら、論を進めることとしたい。

(2) 《祇園町》を事例とする意義

本研究で事例とする《祇園町》は、旧市街地の中央部を東西に貫く四条通の東端、すなわち大和大路（繩手通）から八坂神社（旧・祇園社）西楼門の石段下にいたる街区の旧称である⁷⁾。現在の商業振興組合は鴨川にかかる四条大橋東の川端通以東をもって「祇園商店街」を組織しているため、ここでは現在への研究上の接続性を考慮して川端～大和大路間をも含めて考察する（図1）。「祇園商店街」は、著名な観光スポットである八坂神社や高台寺・清水寺へのアプローチにあたるほか、花街として知られる《祇園新地》の中心に位置することから、京都を代表する観光商店街の一つとなっている。

17世紀前半から祇園社の参詣客や東山の物見遊山客を相手とする諸種の茶屋が建ち並んで花街の基礎を築き、江戸時代を通じて、この一帯が京都でもっとも繁華となった歴史的経緯を考えると⁸⁾、商業空間の構造化は江戸時代にまでさかのぼるとみてよい。だが、明治期以降の都市改造を通じて、《祇園町》は商業の性格とその景観とを大きく変えることになる。結論を先取りして述べるならば、「お茶屋」の建ち並ぶ花街から、飲食店や土産物店を中心とした商店街へと変じることとなる。

現在は四条通沿線を除く南北の街区がお茶屋の立地する花街であるものの、明治期まで「祇園町」は四条通大和大路より東祇園社に至



図1 対象地域の概観

点線の囲みが店舗を復元した範囲。グレーの着色は建物を示す。

るまでをいふ〔。〕妓館娼楼左右に軒を並べて遊治の客常に絶ゆることなく絃歌の声日夜に喧し」というように⁹⁾、《祇園町》それ自体も花街であった。この旧来の花街《祇園町》に大きな転機をもたらしたのが、明治45(1912)年に実施された四条通の「拡築」工事にほかならない。これは、第二琵琶湖疏水の開削および上水道の整備とならんで「三大事業」と位置づけられた京都で最初の本格的な都市改造事業の一環であり¹⁰⁾、本研究の対象範囲では、通りの北側のみが拡幅され、中央部には市電の軌道が敷設された。図2は拡幅後の状況であり、この後に軌道が敷設されて、市電は大正元(1912)年12月25日に開通する。

この事業に関しては、建築史の分野で重要な成果が得られている。すなわち、同じ四条通で鴨川を挟んだ西側、現在の商業中心(四條河原町周辺)に位置する御旅町の「拡築」



図2 「拡築」工事中の《祇園町》

出所)京都市役所編『京都市三大事業』京都市役所,1912。

を論じた中川理の研究である¹¹⁾。中川はこの事業が近代的な「空間再編」に直接関わることを指摘した上で、自らは「拡築」に対する住民の対応について検討をくわえた。しかしながら、同じ商業を基盤とする空間につい

て、「再編」の内実を明らかにすることも必要となろう。つまり、「拡築」は《祇園町》にどのような影響を及ぼしたのか、言い方を換えるならば、商業空間はどのように再編されたのかを問わなければならない。

ここで注意しておくべきは、《祇園町》と御旅町とでは同じ四条通でも地理的文脈をまったく異にしているという点である。近代京都の商業中心である御旅町に対して、《祇園町》は風俗を紊乱する営業として取り締まりの対象となる花街（遊廓）であったからだ。京都市の事業である「拡築」と市電の開通にあわせるかたちで、京都府は「貸座敷取締規則」を改正し、表通りたる四条通に面した「貸座敷（お茶屋）」の営業を禁じた¹²⁾。

その結果として一変した《祇園町》の街路景観が、文学作品などに描かれている。

私の観ました祇園風景、それは余り遠く逆上らなくともこゝ二三十年前に比較しても可なりその変化が目立ちます。四条通や縄手通に面して軒を並べてみた多くの茶屋小方が交通頻繁の通筋風儀上如何との問題などで、ことさらその入口を露次に改め奥深く引込んで営業を継続する向きもあり、また他に転居したり、中にも祇園町の大茶屋万亭の如きは四条通に面した南側に網行灯を掛け見るからお茶屋らしい構へでありましたが、その横町であつた現在の花見小路に表口を付け替へ、縄手通の西側にあつた川付の大茶屋富見代が富永町に転じた跡は骨董商と変つたなど、四条通や縄手通に面しては全く茶屋小方屋の影を没して他の商業地帯と変つて終ひました。¹³⁾

こうした祇園花街をよく知る人物の当時の語りに示されるように、「拡築」にともない表通りと化した《祇園町》では花街に関連する店舗の営業が禁じられて、移転ないし玄関

を路地に付け替えるなどの改築を強いられ、別様の「商業地帯」へと変じていた。「拡築」という物的な改変と風俗営業取り締まりという制度的な実践の双方による「空間再編」の実態を捉えることができるという点で、《祇園町》を事例とする意義も認められよう。

II. 基礎資料の検討と復原方法

(1) 昭和前期の地図類

戦前にさかのぼって商店街の店舗の構成を復原するにあたり、「京都市明細図」を除く、資料として利用可能な地図類を一瞥する。現在の「住宅地図」に類する大縮尺の地図類があればよいが、管見の限り、近代京都に関してはほとんど存在していない。

唯一の例外は、市民風景社編輯「昭和九年六月 京極と其附近案内」である¹⁴⁾。この地図は、北は三条通、西は寺町通、南は四条通、東は河原町通、またその内側の新京極通などに面した店舗の名称が細かに書き込まれており、昭和初期の中心商業地区の店舗立地や景観を復原する上で、重要な情報源となる。

戦後になると、牛垣論文でリストアップされた「火災保険地図」（昭和29年）が存在する¹⁵⁾。北は御池通、西は烏丸通、南は四条通、そして東は鴨川と、「昭和九年六月 京極と其附近案内」よりも範囲は広く、高度経済成長期以前の商業中心に関する貴重な地図資料となる。範囲は限定されるものの、両者を比較すれば、アジア太平洋戦争期をはさむ戦前／戦後の商業空間の変化を明らかにすることもできるだろう。

店舗名まではわからないものの、『京都市に於ける商店街に関する調査』（昭和10年）には、市内8カ所の商店街を取り上げて業種・経営者名を記載した略地図が収録されており、当該地区の分析には有意な資料となる¹⁶⁾。ただし、これらの資料には本研究で対象とする範囲は含まれていない。

「火災保険地図」に比べると精度は低いも

の、昭和31(1956)年には京都初となる住宅地図が刊行され¹⁷⁾、それ以降、現在の『ゼンリン住宅地図』にいたるまで、建物レベルでの空間用途をある程度まで追跡することが可能となる。市内の広域で店舗名を含む固有名と、おおよその位置関係を把握できるという点で、都市地理研究上の有用性はきわめて高い。ただし昭和30年代の住宅地図は、区画の正確性を欠くほか、固有名の記載も実態を反映していないケースも散見されるなど、取り扱いには注意を要する。

(2) 名簿資料と電話番号

近代京都における商店街の店舗の構成を復原するということは、建物別に事業所の立地を特定することにほかならない。一つの建物の複数階にまたがって事業所が立地するケースも考えられるが、現在に比べて職住一致の割合が高く、立体化も進んでいない昭和初期にあって、建物用途が複数の業務空間に分割されることは少なかったであろう。

こうした点も踏まえて事業所の立地を知る上で役立つのが、『京都商工人名録』である¹⁸⁾。店舗名、経営者の氏名と商号、収益税の金額、電話番号などにくわえて、所在地(「住所」)情報を得ることのできる名簿であり、業種別に分類されていることから、特定業種の集積や分布を解明するには便利である。だが、商店街のように空間的範囲を限定する場合には、全事業所の所在地情報から該当する情報だけを抽出しなければならない。

大正期以降の『電話番号簿』についても、『京都商工人名録』と同様の用法が可能である¹⁹⁾。商工業者の場合は契約率が高く、所在地情報も得られるが、職業別の電話番号簿を除くと、一般的にはあいうえお順に並んでいるため、結局は全契約者から特定の地区に関係する情報を抜き出す必要が生じる。

『京都商工人名録』と『電話番号簿』のどちらを利用するにしても、さらに問題となる

のが、住所や所在地に関する京都固有の表記法である。例えば、「四条大和大路東入(ル)」ないし「繩手四条上(ル)」といったように²⁰⁾、事業所(店舗)の位置情報を町名・番地として直接得ることはほとんどできない。直交する二つの街路名(前者の場合は四条通と大和大路通)によって示される交差点からみた方位だけでは、例えば前者の場合、交差点からどれほど東に位置するのか、距離がまったく不明である。この点は、立地を復原する上での大きな課題となる。

(3) 新聞広告の商店街地図

近代京都研究に必須の資料として、『京都日出新聞』ならびに『京都日日新聞』をはじめとする地元紙の記事が、専門分野を問わず利用されている。商業に注目する場合、正月や季節のイベントごとに関連する企業や商店街を含む団体が広告を出したり、新聞社とタイアップした広告記事を大々的に掲載することもあるため、景観復原に資する内容も少なくない。本研究では、『京都日日新聞』(昭和4年)に掲載された一連の商店街案内広告を参考にする(表1)。

これらは、店舗広告とともに商店街の簡略な地図を掲載しているところに大きな特色がある。規模の大きい商店街の場合、複数回にわたり掲載されるため、表中の掲載月日は第1回目を採録した。連載中、店舗の広告は入れ替わるものの、地図は同じものが用いられている。商店街といっても、商店会の組織とは無関係に、区切りのよい範囲で街路に面した主要店舗が列挙されているに過ぎず、また街路ごとで店舗の分布に粗密はあるものの、「昭和九年六月 京極と其附近案内」の範囲外については、おもだった店舗とその立地の全体像を把握できるため、有意な研究資料となる可能性も高い。

本研究で対象とする範囲は「四條ぶるばあ」に含まれる(図3)。この「四條ぶるばあ

表1 『京都日日新聞』(昭和4年)に掲載された商店案内(店舗地図)

掲載月日	見出し	区 間
3月26日	河原町行進(其ノ一)	今出川～五条
4月1日	七條通行進(其ノ一)	本町～千本
4月4日	寺町ぶるばある【遊歩街】(其ノ一)	丸太町～三条
4月11日	大和大路行進	三条～五条下ル
4月13日	四條ぶるばある(其ノ一)	祇園社～烏丸
4月18日	歓楽境千本通	今出川～丸太町
4月20日	歓楽境京極ぶるばある(其ノ一)	三条～四条
4月22日	三條ぶるばある(其ノ一)	三条大橋～堺町
4月28日	四條ぶるばある(其ノ一)	烏丸～大宮
5月13日	夷川通商店案内	寺町～車屋町
5月26日	京都の誇り錦市場紹介(其の一)	京極～高倉
5月30日	古き傳統と誇りを有する五條通紹介(其壹)	烏丸～木屋町

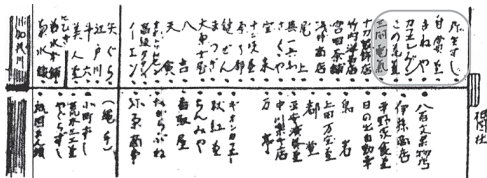


図3 「四條ぶるばある」における対象範囲
出所『京都日日新聞』(1929年4月13日)。

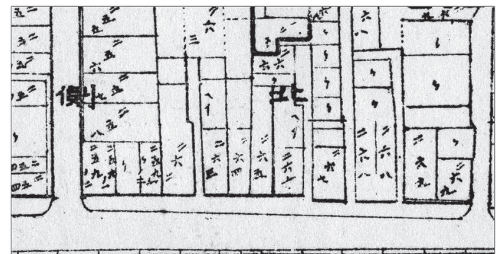


図4 「京都市明細図」(長谷川家版)の一部
画像は立命館大学アート・リサーチセンター提供。

る」の地図で注目されるのは、「カフェレーヴン」をはじめ文学作品などにたびたび登場しながら、その所在地がまったく不明であった店舗も記載されていることである。この点だけをとっても、昭和初期『祇園町』における店舗を復原するための素材にはなるだろう。

具体的な手順については次節で整理するが、上記の(1)・(2)を踏まえて抽出した店舗情報をただ並べてみても、その資料の性格からして立地(位置関係)の正確性を担保し得ないことは明らかである。「四條ぶるばある」に示された店舗とその位置情報を補助線

として予備的に入れておくことは、復原の作業に資すると考えられる。

(4) 復原の手順

ここまで挙げてきた諸資料の特性を踏まえて、四条通鴨東の商店街を復原する手順を整理する。まず基礎となる作業として、「京都市明細図」にもとづき、店舗立地の可能な区画(建物)を確定する。具体的には、長谷川家版(大正15年前後)をベースとしつつ(図4)、総合資料館版(昭和26年頃)の色分けと書き

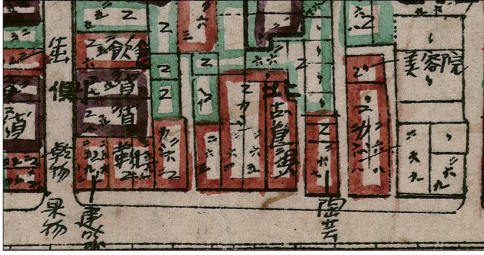


図5 「京都市明細図」(総合資料館版)の一部
 画像は立命館大学アート・リサーチセンター提供。

込みにしたがいい(図5)、建物用途の判読可能な区画を抽出する。そこに、「四條ぶるばある」記載の店舗を『京都市全住宅案内図帳』(昭和31年・同34年)と照合し、名称と位置関係とがある程度まで合致する店舗、くわえて現在も営業を続ける店舗を地図上で固定し、立地を確定する。

次いで、昭和戦前期に刊行された『京都商工人名録』ならびに『電話番号簿』から、現・祇園商店街を構成する範囲に所在する事業所をすべて抽出する。具体的には『京都商工人名録』の昭和3年版・昭和15年版²¹⁾、『京都市電話番号簿』の昭和11年・昭和13年²²⁾を用いることとし、その他の各年版は補助的に用いる。いずれも、長谷川家版「京都市明細図」に記された町名(主として祇園町北側・祇園町南側)と地番に該当するものを抽出するが、上記のとおり、「四條大和大路東入」や「祇園石段下」といった関連する所在地情報も漏れなく取り扱う。なお、このほかにも店舗案内や広告などを参照した²³⁾。

「四條ぶるばある」に記載のない店舗については、これらの資料に記載があり町名・地番も「京都市明細図」と合致もしくは近似する場合、あるいは『京都市全住宅案内図帳』(昭和31年・同34年)と照合して名称と位置関係とがある程度まで合致するか現在も営業を続けている場合については、確実に立地したものとみなす。

ただし、これら資料上の制約から、店舗の構成の復原時期には、昭和4年から昭和15年までの幅を持たざるを得ないことを、あらかじめ指摘しておきたい。

以上のような手順を踏むとしても、本章(2)で述べた京都固有の表記法が位置の確定を困難にすることには変わりはないが、限られた資料をもとに作業を進めるほかはない。この点においても、「四條ぶるばある」に表示された位置情報は、一つの指標となる。

Ⅲ. 昭和初期《祇園町》の店舗復原

(1) 「四條ぶるばある」記載の店舗

「京都市明細図」にもとづき店舗の立地が可能な区画を分析した結果、北側には72件、南側には58件あることが判明した。北と南とで差が大きいのは、南側に弥栄小学校、祇園一を誇る規模のお茶屋「万亭(一力)」、そして松竹の経営にかかる大劇場「南座」の立地していることなどが影響している。

「四條ぶるばある」に記載された店舗は北側で31件(約43%)、南側で20件(約32%)である。新聞広告では字のつぶれている箇所や、誤表記ないし仮名表記があるものの、Ⅱで取り上げた『京都商工人名録』(昭和3年版・同15年版)や『京都市電話番号簿』(昭和11年・同13年)などときあわせて検討したところ、1件を除いてすべての文字を起こし、補正することができた(図6)。しかしながら、結果として北側は半数以上を、同じく南側は約3分の2の店舗を特定し、位置を確定しなければならないことになる。ただし、「四條ぶるばある」掲載分のうち、営業場所を変えることなく現存している店舗が北側に7件、南側に3件あるほか、昭和31年の住宅地図と合致する店舗が北側に3件、南側に9件あるため、これらを地図上のアンカーポイントに据えて、その他の店舗の位置を比定することは可能となる。

ここで、当時の四條通を石段下から四條大

祇園社

彌生壽司	
甘賞堂喫茶店	
きねや	
カフェレーヴン	
この花堂	
三浦電気	
ナカ装飾店	
竹内洋品店	
宮田茶舗	
浅井商店	
尾上	
與市兵衛	
さくや	
鳳来家	
十二段家	
原了郭	
鍵善	
まつぎ	
大原女家	
八吉寅	
天無線	
高級タクシー	
ノーエン	
繩手	
矢ぐら	
江戸川	
斗六	
美人堂	
菊水本舗	
菊水館	
	加茂川

八百文果物店

伊藤商店

平野家食堂

日の出自動車

鳥岩楼

長田萬寶堂

都堂

平安演奏堂

中川楽器店

万亭

ギオンカフェー

秋江堂

ちんみや

香取屋

たから船

藤原商事

小町ずし

荒木三工堂

矢倉ずし

祇園まん頭

橋に向いて歩いた人物の語りに注目したい。それは、田辺聖子の小説『道頓堀の雨に別れて以来なり』に主人公として描かれた川柳作家、^{きしもとすいふ}岸本水府(1892-1965)の「…〔略〕…十二段家、平の家など異色のある料理屋、東洋亭、ノーエンなどのカフェーの灯りを眺めながら歩を移すと間もなく南座の櫓が見えて来る」という短い語りである²⁴⁾。彼の目に映った昭和初年の街路を彩る景観要素は、特色のある料理屋にくわえて、新しいサービス業として隆盛をきわめていた「カフェー」であったことがわかる。祇園新地甲部の芸妓が、「祇園の最初のカフェーは東洋亭ぞす。次にノーエンぞすナア。」²⁵⁾と述べるように、水府の挙げた二つのカフェーは、「祇園町」で最初期に立地した店舗とみてよい。

これらを「四條ぶるばある」に沿って東から順に並べ替えると、「平野家食堂-十二段家-東洋亭(ギオンカフェー)-ノーエン(農園)」となる。平野家食堂は「芋棒」で知られる料理屋の支店、十二段家はお茶漬の「元祖」を標榜する有名店だが、東洋亭については注記を要するだろう。

僕の記憶に誤りがなければ、京都におけるカフェーの始まりは、今もその名を石段下に伝えてあるギオン・カフェーであつたと思ふ。まだその頃は一階建の薄暗い東洋亭であつた……。²⁶⁾

花見小路を少し西へ行つたところの南側に東洋亭「祇園カフェー」というのがあつた。²⁷⁾

東洋亭とは明治34(1901)年創業の京都を代表する洋食の老舗であり、支店として《祇園町》にカフェーを開業していたのであつた。また「四條ぶるばある」の中には、「カフェーレーヴン」の名もみえる。これは、「祇園石段下の『レーヴン』というカフェーに、梶

図6 「四條ぶるばある」記載の店舗
ゴシックは『京都市全住宅案内図帳』(昭和31年・同34年)で位置が特定できる店舗。囲みは現在も営業している店舗。

井や、中谷や、私達が毎晩のように集つたのは、もう三高の生活も終りに近い頃である」²⁸⁾、あるいは「祇園の石段下にレーヴン(大鴉)といふカフェがあり、そこがみんなの根城になつた」²⁹⁾というように、短編小説『檸檬』で知られる梶井基次郎らが集つたカフェである。

レーヴンも、そしてギオンカフェやノーエンも、「石段下」や祇園町「南側」というように、これまでおおよその位置は知られていたものの、文学史や文化研究その他において、その立地が明確に把握されてきたわけではなく、この点においても「四條ふるばある」には地図資料としての価値が見いだされる。

では、これら三つのカフェは、実際のどの区画に立地したのだろうか。

(2) 位置の確定

本節では、三つのカフェ(レーヴン・ノーエン・ギオンカフェ)を事例として、II(4)に示した手順を踏んで、昭和初期(祇園町)における店舗構成の復原を試みる(図7)。

1) レーヴン 現在も営業を続ける「三浦電気」と東大路の間には「レーヴン」を含めて5件の記載があるものの、「京都市明細図」にもとづいて確定した区画数は11である。したがって、残り6件の店舗を特定しつつ、それぞれの位置を求めなければならない。

II(4)の手順にしたがうと、位置の比定が可能となる。まず、『京都商工人名録』(昭和3年版)に掲載された該当範囲の事業所5件は昭和31年の住宅地図にも記載されているので、位置が確定する³⁰⁾。

次いで、『京都市電話番号簿』(昭和13年)から「彌生壽司」と「この花堂」の位置が判明した。『京都市電話番号簿』は昭和10年以降になると、祇園町北側・南側で、その多くに地番も付記されることから、結果として本研究ではもっとも有用な資料となった。

地番	「ふるばある」	商工人名録 × 住宅地図	電話番号簿	確定
東大路				
292	彌生壽司 甘賞堂 きねや レーヴン この花堂		彌生壽司	彌生壽司
291				甘賞堂
289		林商店	林商店	林商店
288		柿善	柿善	柿善
				きねや
287				レーヴン
286			この花堂	この花堂
285		かづら清	かづら清	かづら清
284		かき源	かき源	かき源
282		野田写真館 (バリ理容館)	野田写真館 バリ理容館	野田写真館 バリ理容館
282	三浦電気	三浦電気	三浦電気	三浦電気
繩手通				
花見小路				
571	大原女家 八吉 天寅 鳳無線 祇園タクシー ノーエン	農園	農園	農園
572		亀屋長徳	亀屋長徳	亀屋長徳
572				[不明]
572				[不明]
573			ギルビー	ギルビー
573		(村井銀行)	(村井銀行)	(村井銀行)
573				[不明]
573			魚甚	魚甚
573				[不明]
573		秋江堂	伊原電機	伊原電機
573		ギオン薬局	ギオン薬局	ギオン薬局
573		平岡商店	ササナミ	ササナミ
575				ギオンカフェ
576			河文	河文
577	秋江堂	秋江堂	秋江堂	
577	幾岡屋	幾岡屋	幾岡屋	
578	平岡商店	平岡商店	平岡商店	
579			[不明]	
580	香取屋	香取屋	香取屋	香取屋

図7 位置確定の手順

(上：カフェレーヴン/中：農園/下：ギオンカフェ) 区画は「京都市明細」にもとづき確定した。太字は位置の確定した店舗。

以上の手続きを経て、空いた区画は3件にしぼられる。そこに「四條ふるばある」の残りの3件を東大路側から順番に当てはめる

ことで、これまで「石段下」としか記されることのなかった「レーヴン」の位置も確定する³¹⁾。

2) ノーエン 「ノーエン」についてみると、縄手通のすぐ東側で「祇園タクシー」(「ぶるばある」の記載は「高級タクシー」)の西側に位置している。「今のカフェ・ノーエンと自動車屋はんの所は自然石を前に控へた井筒といふ大きなお青楼はんで……」³²⁾という同時期の語りが残されており「ノーエン」と「祇園タクシー」とは隣接していたものとみてよい。

「ノーエン」の位置は、本研究で用いた主たる資料には「四条大和大路東」とあるばかりで明確にならないものの、経営者が祇園町北側242の土地を所有していたことから³³⁾、この地所に立地したものと判断される。なお、「四條通東山を望む」と題された昭和4年前後の絵葉書(図8)を拡大してみると、「ノーエン」と「たばこ」の看板が写り込んでいた。手前の「たばこ」から数えて3軒目にあたることから、「ノーエン」の建物である確度は高い。

ところが、『京都市電話番号簿』(昭和13年)では、新京極の洋食店「スター食堂」の系列店である「スターソーダファウンテン」がこの区画に立地している。昭和7年の段階



図8 昭和初年の街路景観(菊水館屋上から八坂神社方面を望む)

出所) 筆者所蔵の絵葉書

で同店の営業が確認されるので³⁴⁾、昭和5～7年の間に「ノーエン」の後を継いでスター食堂が進出したものと考えられる。

なお、『京都商工人名録』(昭和3年版)によると「ノーエン」は祇園町南側にもう一店舗あった。また、版画家の徳力富吉郎の版画「祇園町の夜更」には、作品中に「昭和八年春」と書き込みがあり、花見小路を挟んで「一力亭」と向かい合う二階建ての町家に「ノーエン」という看板が掲げられていることから、北側の店舗を廃して経営を一本化したものと推察される。この「ノーエン」は現在も同じ場所で営業を続けており、店内には「祇園町の夜更」が飾られている。

3) ギオンカフェー 三つのカフェーの中でも、「ギオンカフェー」の位置特定はもっとも困難である。なぜなら、花見小路と「香取屋」との間には18もの区画があるにもかかわらず、「四條ぶるばある」にはわずか3件の店舗しか記載されていないからだ。

まず、『京都商工人名録』などから現存する店舗も含めて7件の区画を確定した。長谷川家版「京都市明細図」に書き込みのある「村井銀行支店」を含む。次いで、『京都市電話番号簿』によって5つの区画がうまる。ギルビー(西洋料理)、魚甚(たばこ店)、伊原電機製作所の所在地は、いずれも「祇園町南側573」であり、「四條ぶるばある」にも記載のないことから、並び順は不明である。しかしながら、ギルビーと伊原電機製作所は、昭和31年の住宅地図に書き込まれた名字と経営者の名字が一致すること、魚甚是総合資料館版「京都市明細図」の書き込みが「タバコ」であることから、それぞれ表中の位置に措定した。

この段階で所在地の定まらないのは「ギオンカフェー」だけである。また、残り5区画に立地した店舗については、本研究で利用した資料からは明らかにし得なかった。では、空いた6つの区画のどこに「ギオンカフ

エー」は立地したのだろうか。

東洋亭の支店という有名店であるだけに、『京都商工人名録』や『京都市電話番号簿』はもちろん、その他の案内書にも必ずといってよいほど掲載されているものの、所在地については、「四條大和大路東入」・「四條花見小路西」や「祇園町南側」と記されるのみで、明確にはわからない。そこで、先述の「四條通東山を望む」(図8)を拡大してみると、鉄筋コンクリート4階建ての香取屋(現・京都市指定「歴史的意匠建造物」)から数えて6軒目の屋上部分に「キリンビール」という横文字を大きくあしらった洒落た建造物がみえた。《祇園町》最初のカフェであり、キリンビールの特約店である東洋亭の支店という点を踏まえるならば、「ササナミ」(酒場)と「河文」(古美術商)とに挟まれたこの建物が「ギオンカフェ」と考えられる。

以上、三つのカフェに例を取って、立地を確定するプロセスを具体的に示した。この作業を対象範囲の全域で行ない、結果として得られたのが図9である。北側は72件中55件(76%)、南側は58件中43件(74%)の店舗を特定するにいたった。ただし、地番まで特定できなかった店舗、地番を特定したものの同一の地番が複数存在するために入れ替わる可能性のある店舗も複数ある。今後、新しい資料や情報によって、補遺・補正することも可能となるだろう。

(3) 強制疎開の影響

店舗名を確認しながら、位置を特定できなかった原因は、資料・情報の不足にくわえて、京都では一般に「強制疎開」と称される「建物疎開」の影響が大きい³⁵⁾。鴨川-八坂神社間の四條通沿線では、4カ所の疎開地が確認される。総合資料館版「京都市明細図」では着色されていない区画から疎開跡地を把握することもできるが、「米軍空中写真」(1948年撮影、1万分の1)はいっそう鮮明に

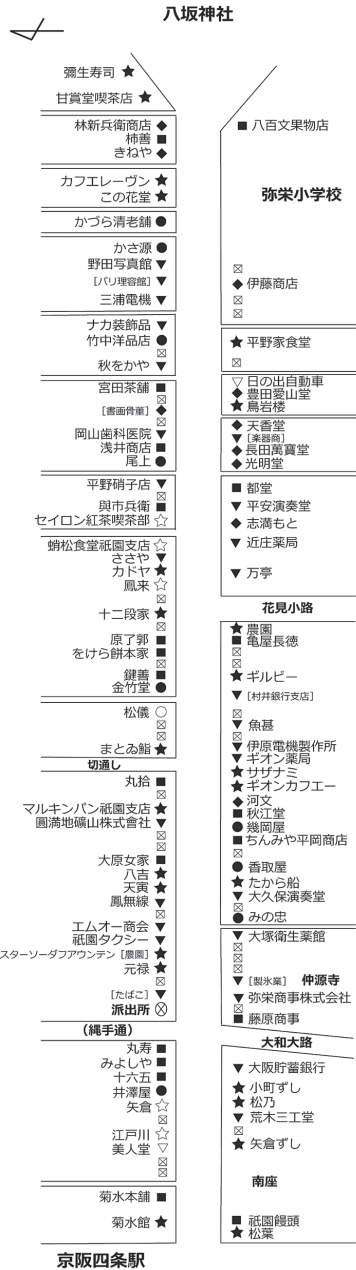


図9 復原した《祇園町》の店舗群 (昭和4~15年頃)

「京都市明細図」(長谷川家版・総合資料館版)、「四條ぶるばある」、『京都商工人名録』、『京都市電話番号簿』などより作成した。白抜きの記号は推定される位置、[]は推定される店舗名や業態である。

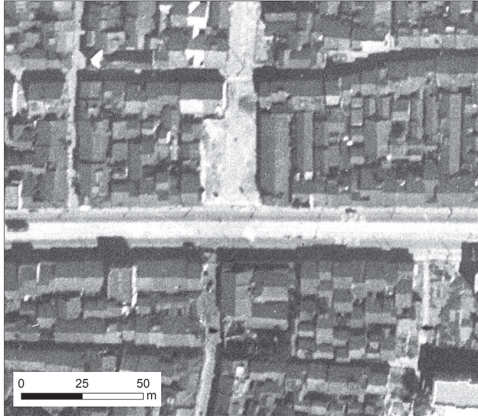


図10 米軍空中写真にみる「強制疎開」の痕跡
出所) 1946 (昭和21) 年米軍撮影 (USA R275-A-7 104)
空中写真

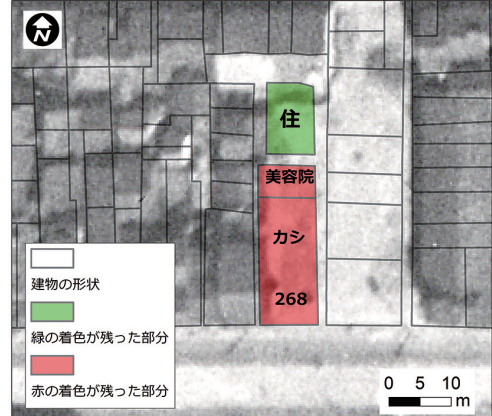


図11 「京都市明細図」(総合資料館版)の誤表記
出所) 「京都市明細図」(京都府立京都学・歴史館所蔵)の
GISデータ

映し出す(図10)。

疎開地に立地した店舗については、部分的ながらも、以下のような語りが残る。

〔鳥岩楼〕もとは、祇園石段下西入にあったが、戦時中に疎開のため、昭和二十年にここへ移ってきた。³⁶⁾

……十二段家というと、多くの人々は、昔の四条通にあった有名なお茶漬の店を思い出すだろう。疎開でなくなったが、もとは四条の花見小路の北側にあり……。³⁷⁾

……とりわけ変わったのは、南座の真向かいで、人家が取り払われたあと、最初は小公園になると聞いていた空地も、いまは駐車場になってしまって、まことに殺風景な景観を呈している。……私の若いころには、古めかしい家並みが好ましく立ち並んでいて、芝居町らしい雰囲気醸し出していた。そんな中の一軒に「美人堂」というプロマイドを売っていた店のあったことを思い出す。³⁸⁾

鳥岩楼と十二段家は場所を変えて、その名を現在まで継いでいるものの、戦後、美人堂は再開されることがなかったようだ。十二段家は『京都市電話番号簿』(昭和13年)から「祇園町北側268」と地番がわかっているため、位置を確定することができたものの、総合資料館版「京都市明細図」では、当該区画が着色されており、強制疎開の跡地にはなっていない。

そこで、総合資料館版「京都市明細図」の区画情報を「米軍空中写真」の当該部分に重ね合わせたのが図11である。これによると、「祇園町北側268」の区画に位置する東側半分の建物は除去されていることがはっきりとわかる。よって、この部分は総合資料館版「京都市明細図」の誤りということになる。また、弥栄小学校西側でも、鉄筋コンクリート造りのためか一軒だけ除去されずに残存した建物の位置が総合資料館版「京都市明細図」では誤っていた。景観復原するにあたり「強制疎開」の跡をめぐるには、空中写真ほかの資料を用いて、慎重に検討しなければならぬまい。

IV. 成果と展望

(1) 《祇園町》の変容

昭和初年の京都風景を、市内に在住する大学教員、商店主、画家、芸妓など、多彩な面々が綴った随筆集に『京ところどころ』ならびに『京都新百景』がある³⁹⁾。どちらにも、「拡築」後の《祇園町》に関する記述が含まれており、興味ぶかい。

例えば、「悪いといへば四条の電车道これほど殺風景なものはまあ、外に見当りまへんなあ」⁴⁰⁾、あるいは「狭い四条通が今のやうに広げられ…〔略〕…、殺風景な電車が通たり…〔略〕…通りにあつたお茶屋の影はすっかり消えて、今のやうに味もそつけないガラ【ガラ】した四条通になつたんどす」⁴¹⁾というように、この地域をもっともよく知る芸妓たちの口からは、次々と嘆き節が漏れた様子がみられる。

中には、

何んというても四条通りに電車がついてから、祇園新地は二つになつたやうな形どす。昔は石段下から縄手まではもつと狭い通りで、東を向くと祇園さんの楼門が丁度まあまん中に見えとした。…〔略〕…今は大分右に見えますやろ、あれだけ北側の家が引込まはつたもんどす。⁴²⁾

といったように、「拡築」と市電の通行にとまなう空間的な断絶、そして北側だけが拡幅されたことから、本来、東を向けば正面に見えていた八坂神社の楼門が南にずれて見えることなど、《祇園新地》で暮らす者にしか実感され得ない空間変化に関する指摘もみられた。

くわえて重要なのは、「十二段家はんの辺りから野村銀行も村井銀行も両側ともずうつと掛行燈を並べたお青楼ちややはんで……」⁴³⁾と回顧される《祇園町》の街路景観が、通りに

「面しては全く茶屋小方屋の影を没して他の商業地帯」に変わってしまったというように、脱花街化の進んだことである。「それにしてもカフェーはふえました」⁴⁴⁾、あるいは「洋食屋やカフェーも日一日と増えて」⁴⁵⁾などと語られるごとく、この脱花街化を象徴したのが、花街にとっては商売敵ともなるカフェーであった⁴⁶⁾。

本研究で立地の確認された店舗を業種別に整理したのが、表2である。全体の約3割を占める飲食店がもっとも多い。このうち、洋食店・カフェー・喫茶店は13件にのぼる。次いで、菓子を中心とした食品店に、袋物や履物、そして装飾品など、芸舞妓を顧客とするような身の回り品を取り扱う店舗がつづく。さらに、書画・骨董など、新古の美術商も立地した。

こうしてみると、昭和初期の街路景観が必ずしもカフェー一色に染められていたわけではないこともわかる。しかしながら、かえってこのことは、「拡築」後の四条通を表象するランドマークがカフェーであったことを物語っている。

以上、本研究では「京都市明細図」をベースにして、昭和初期の《祇園町》に立地した店舗を復原してきた。130軒におよぶ規模の両側商店街を対象として、約7割にあたる店舗の構成を復原できたことは、大縮尺の都市

表2 業種別の店舗数

業種	記号	北	南	計
飲食	★	18	11	29
食品	■	13	7	20
身の回り品	●	7	3	10
美術品	◆	3	7	10
その他	▼	14	15	29
計		55	43	98

記号は図9と対応している。

図である「京都市明細図」とⅡで検討した基礎資料、そしてそれらを組み合わせた復原方法が、ある程度まで有効であったことを示している。

また、「拡築」を契機として花街から商店街へと変じた空間の内実を見通すことで、中川理の指摘する「空間再編」の一端を明らかにすることもできた。とりわけ重要なのは、文人たちの回顧録にあらわれた店舗、あるいは芸妓たちの語りにも示された場所感覚の変化や景観遷移を、地図の作成を通じて地理的な文脈に定位することができた点にあると思われる。

(2) 残された課題と展望

四条大橋から石段下の四条通で、「京都市明細図」にもとづき店舗立地の可能な区画として認められるのは130件であった。このうち「京都市明細図」に最初から書き込みがあるのは、杉浦邸(＝お茶屋、一力亭)、村井銀行支店・大阪貯蓄銀行支店、そして菊水(レストラン)のわずか4件に過ぎない。最初に概観しておいたように、「京都市明細図」の書き込みから得られる文字情報に着目して成果を挙げている研究もあるが、本研究で出発点に据えたのは空白の区画情報のみである。それゆえ、『京都市日日新聞』の広告「四條ぶるばある」は、重要な足がかりとなった。

とはいえ、限られた紙面に掲載された広告のため、当然すべての店舗を網羅しているわけではなく、簡略された地図中の2店舗間には最大で12区画分の空白が存在した。また、「四條ぶるばある」でしか存在を確認できなかった店舗もあり、並び順についてもつじつまの合わない箇所もみられた。

「四條ぶるばある」にはこのような問題点があるにせよ、昭和初年の主要商店街に立地した店舗に関する貴重な情報であることに変わりはなく、「四條ぶるばある」の残りの区間(鴨川～烏丸間)、「寺町ぶるばある」(丸太

町～三条間)、「京都の誇り 錦市場紹介」(新京極～高倉間)などは、いずれも地図資料の少ない地区にあたるため、今後、補助資料として用いることはできるだろう。

事業所の立地を考察する際、『京都商工人名録』と『電話番号簿』は基礎資料となるが、交差点を中心とした「上ル(北)／下ル(南)／東入ル／西入ル」の表記問題を払しょくすることは容易でない。結果的に本研究では、『京都市電話番号簿』(昭和13年)に記載された所在地情報のうち、北側・南側各14件(計28件)を位置確定の根拠とした。いずれも地番が付記されていたためであるが、祇園町北側・南側ともに、周辺では類をみないほど広域なために地番まで記載された可能性が高く、『電話番号簿』をほかの場所で同じように活用できるとはかぎらない。

総合資料館版「京都市明細図」にも、そして『京都商工人名録』と『電話番号簿』にも、大小を問わず誤りがあった。作業を進めるにあたっては、語りや記憶も含めたすべての資料に誤りがあり得るものと想定し、複数の資料を単純に組み合わせるのではなく、突き合わせることで、正確な立地を復原する必要がある。学術的な復原である以上、手続きをも含めた再現可能性も担保されなくてはならない。

本研究で復原することのできなかった残り約3割の店舗については、今後も補遺・補正の可能性は残されているものの、方法上の問題というよりは新しい資料・情報に依存せざるを得ない状況にある。また、建造環境の固着性を前提とするにしても、複数の年次にまたがる資料を取り合わせて分析すれば、なかには店舗の入れ替わりも起こり、一時点の復原ではなく、今回の昭和4(1929)年から昭和15年のように、時期に幅を持たせた復原とならざるを得ないという課題も残る。

とはいえ、本研究を通じて得られた昭和初期の商店街地図を出発点とすれば、建物レ

ヴェルの用途を現在までの100年近くにわたり追跡調査することが可能となる。たんなる通時的な変化ではなく、社会経済ないし文化的な背景をも踏まえた動的な研究の展開が期待される。

(立命館大学)

【付記】

本稿はJSPS科研費(16H01965 代表: 矢野桂司)の助成を受けた研究成果の一部であり、2019年人文地理学会大会(関西大学)でポスター発表した内容をまとめたものである。

注

- 1) 牛垣雄矢「昭和期における大縮尺地図としての火災保険特殊地図の特色とその利用」歴史地理学47-5, 2005, 1-16頁。同「東京都千代田区秋葉原地区における商業集積地の形成と変容」地理学評論85-4, 2012, 383-396頁。
- 2) 石樽督和『戦後東京と闇市 新宿・池袋・渋谷の形成過程と都市組織』鹿島出版会, 2016。三橋順子『新宿「性なる街」の歴史地理』朝日選書, 2018。
- 3) 赤石直美・瀬戸寿一・福島幸宏・矢野桂司『『京都市明細図』の記載内容に関する一考察』立命館地理学26, 2014, 73-89頁。山近博義「京都市明細図の作製および利用過程に関する一考察」大阪教育大学紀要第Ⅱ部門64-1, 2015, 25-42頁。河角直美・矢野桂司・山本峻平「2つの『京都市明細図』の概要とそのGISデータベースの構築: 京都府立総合資料館所蔵本と長谷川家住宅所蔵本」地理学評論90-4, 2017, 390-400頁。
- 4) 「京の記憶アーカイブ」(<http://www.archives.kyoto.jp/>) 閲覧日2020年10月21日。近代京都オーバーレイマップ (<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/Modern-Kyoto/>) 閲覧日2020年10月21日。
- 5) 中村莉乃・小畑紗良・河角直美・大場修「近代京都における市街地南部の拡張過程」建築歴史・意匠, 2016, 433-434頁。橋本歩美・河角直美・大場修「近代京都における市街地形成と土地区画整理事業に関する史的研究 -京都市西部を事例に-」日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系56, 2016, 589-592頁。吉川貴絵・葉狩由衣子・河角直美・大場修「近代京都における市街地拡張にともなう町家形成に関する史的研究」日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系56, 2016, 585-588頁。
- 6) 赤石直美・瀬戸寿一『『京都市明細図』GISデータベースと占領期地図のデジタル化』アリーナ15, 2013, 20-25頁。西川祐子『古都の占領 生活史からみる京都1945-1952』平凡社, 2017。
- 7) 大和大路よりも東側の四条通は《祇園町》と称される両側町であったが、明治元年に「祇園町北側」と「祇園町南側」の南北二町に分離されて現在にいたる。南北を区別しない通称としての《祇園町》は、昭和戦後期まで使われつづけた。通称地名のため、ここでは《 》で括って表記している。碓井小三郎編「京都坊目誌下巻之十五」(『新修京都叢書』第二十巻, 臨川書店, 1970), 348頁。なお、本稿ではこのような通称地名を《 》で括って表記する。
- 8) 加藤政洋『京の花街ものがたり』角川選書, 2009, 26-62頁。以下、花街に関わる語句や規定についても、この文献を参照されたい。
- 9) 的場麗水『京都名所独案内』吉野屋, 1895, 43頁。なお、引用文中の〔 〕は筆者が句点を補ったものである。
- 10) 京都市役所編『京都市三大事業』京都市役所, 1912。
- 11) 中川理『京都と近代 せめぎ合う都市空間の歴史』鹿島出版会, 2015, 125-150頁。
- 12) 『京都日出新聞』大正元年八月二十四日, 同八月二十五日。
- 13) 中上鹿城(技芸倶楽部主幹)「祇園南側新旧とり【どり】」(大阪毎日新聞社京都支局編『京都新百景』新時代社, 1930), 96-97頁。傍点による強調は引用者。「小方屋」とは芸妓が寄宿する家のこと。
- 14) 市民風景社編輯「昭和九年六月 京極と其附近案内」市民風景社, 1934 [京都府立京都

- 学・歴史館所蔵]。
- 15) 日本火保図株式会社「火災保険地図」都市整図社, 1954。なお, 正式な名称は付されていない。
 - 16) 京都商工会議所編『京都市に於ける商店街に関する調査』京都商工会, 1935。この資料を用いた研究に, 次の論考がある。渡邊秀一「近代京都における商業地域の存在形態——四条通の商店街形成プロセスを視野に入れて——」*仏教大学総合研究所紀要* 22, 2015, 49-64頁。
 - 17) 『京都市全住宅案内図帳』住宅協会, 1956。
 - 18) 欠年はあるものの, 大正9(1920)年以降の版が京都府立京都学・歴史館に所蔵されている。
 - 19) 欠年はあるものの, 明治45(1912)年以降の版が京都府立京都学・歴史館に所蔵されている。
 - 20) 「～東入(イル)」は交差点から東の, 「～上(アガル)」は北の, 「～下(サガル)」は南の方向を示す。
 - 21) 松尾音治郎ほか編『京都商工人名録 昭和三年改訂』京都商工人名録発行所, 1927。原澤久男編『京都商工人名録 昭和十五年版』京都商工人名録発行所, 1940。
 - 22) 京都中央電話局編『京都市電話番号簿 昭和十一年四月一日現在』京都中央電話局, 1936。京都中央電話局編『京都市電話番号簿 昭和十三年四月一日現在』京都中央電話局, 1938。
 - 23) 具体的には, いずれも店舗広告を多数掲載している以下の3点である。①西村善七郎編『大京都』大京都社, 1928。②小牧彰一編『大京都市観光案内』(関西名勝史蹟調査会, 1932)の附録「大京都名物名産著名商店紹介沿革誌」。③田中辨之助編『京極沿革史』京報社, 1932。
 - 24) 岸本水府「京阪神盛り場風景」(酒井真人・岸本水府『三都盛り場風景』誠文堂, 1932), 87頁。
 - 25) 辻ふく「四条碩と縄手」(前掲13)『京都新百景』, 108頁。
 - 26) 山本修二「のみある記 第十三章」『洛味』25, 1940, 73頁。
 - 27) 前芝確三「春宵よもやま話 一代前前の京都をしのびつつ」『洛味』66, 1956, 23頁。
 - 28) 外村繁『滯標・落日の光景』講談社文芸文庫, 1992, 114頁。
 - 29) 中谷孝雄『梶井基次郎』筑摩叢書, 1969, 103頁。
 - 30) なお, 「パリ理容館」に関しては, 『商工人名録』をはじめとする諸資料で営業の実態は確認できなかったものの, 祇園商店街振興組合ウェブページの紹介文(「大正13年……この祇園の地に移り, 営業を始めました」と「京都市明細図」・「住宅地図」の記載から, 昭和戦前期の段階で営業していたものと判断した。祇園商店街振興組合ウェブページ (<https://www.gion.or.jp>), 閲覧日2019年8月13日)。
 - 31) なお, 絵葉書資料館(神戸市垂水区)の所蔵する絵葉書「(京都) 最も繁華なる祇園石段下附近(四條通)」で「レーヴン」の看板のある建物の位置を確認している。
 - 32) 中山きみ「祇園」(岩井武俊編『京ところどころ』金尾文淵堂, 1928), 186頁。
 - 33) 稲津近太郎編『京都地籍図』(復刻版)不二出版, 2008。
 - 34) 前掲23) ③田中辨之助編『京極沿革史』掲載の広告(頁数なし)。
 - 35) 京都の建物疎開の概要に関しては, 次の文献を参照されたい。水内俊雄ほか『モダン都市の系譜 地図から読み解く社会と空間』ナカニシヤ出版, 2008, 213-215頁。
 - 36) 白井喜之介『京都味覚散歩』白川書院, 1962, 140頁。
 - 37) 前掲36) 56頁。
 - 38) 井上甚之助『わたしの京都』墨水書房, 1973, 201頁。なお, 南座横の「にしん蕎麦」で有名な松葉も強制疎開にあったというが, 地図や空中写真では確認するにいたらなかった。
 - 39) ①岩井武俊編『京ところどころ』金尾文淵堂, 1928。②大阪毎日新聞社京都支局編『京都新百景』新時代社, 1930。
 - 40) 松井若照(祇園芸妓)「祇園一円山」(前掲39) ②), 93頁。
 - 41) 辻ふく(祇園芸妓)「四条碩と縄手」(前掲

- 39) ②), 106-107頁。
- 42) 中山きみ (芸妓)「祇園」(前掲39) ①), 186頁。
- 43) 中山きみ (芸妓)「祇園」(前掲39) ①), 186頁。
- 44) 辻ふく (祇園芸妓)「四条碩と縄手」(前掲39) ②), 109頁。
- 45) 前掲40) 松井若照「祇園一円山」, 95頁。
- 46) この点については, 加藤政洋『敗戦と赤線』(光文社新書, 2009) の第2章を参照されたい。また, 洋食店がカフェーとしての機能を果たしたという点については, 以下の文献を参照されたい。加藤政洋『酒場の京都学』ミネルヴァ書房, 2020, 第2・3章。斎藤光『幻の「カフェー」時代 夜の京都のモダニズム』淡交社, 2020。